

唐土と南蛮の交錯

—近世日本の宇宙観を巡って—

サイジ・モンテイロ ダニエル*

1. はじめに

拙論では、江戸時代中期の世界観を反映した地理・天文学者、西川如見の宇宙論を中心に、中国と西欧に由来する天文学及び自然現象に関する知識の日本における流布に注目する。西川如見は長崎の町人であり、西欧及び中国からの知識の受容において特権的な地位にあった。天文学を巡る『天文義論』（正徳二年1712年）、『両儀集説』（正徳四年1714年）等に見られる西川如見の著書は朱子学に基づいた理論を展開する一方で、南蛮人が伝えた地図製作法の要素をも採用している。西川如見のような日本の天文学者によれば、宋学的な自然哲学と西欧からの天文学的・地理学的な技術は相容れないものでは決してなく、むしろ宋学的な自然哲学と西欧からの天文学的・地理学的な技術は共存すると考えられた。西川如見や貝原益軒を含む近世の学者は合理的な傾向にあり、ただ儒教の経典を学習するだけにとどまらず、経験または観測に根ざした考えをもっていた。このような博物学的な動向は経験的実学とも呼ばれる。実学という学問は日本に限らず、近世中国・韓国の思想史においても重要な位置を占める。

実学というものは、宋代儒教の理学が起源である。程頤・朱熹に始まり、仏教の「空虚」に対して、儒教者は天地万物の「実」を主張する。実学という語は甚だ幅広い範囲に及び、史料によって多種多様な意味を持っているが、近世日本思想史

に於ける「実学」は科学的な特色があると言っても過言ではない。言うまでもなく、近世思想のいわゆる「科学」は明治以降の概念とかなり異なり、目標・過程ひいては結果の分析は全く違う方面に向かっている。この時期についての研究は、科学史の視点から解釈することが多いが、そのようなアプローチには限界があるのではないだろうか。

本稿の目標は、近世の思潮を日本固有の前期科学的な象徴として決めつけるのではなく、西川如見の著書を元に、天文学の知識を包含する江戸中期の思想を総合的に分析することである。

2. 天文学と運氣論

西川如見の宇宙観はどのようなものかという点、独創的な思想ではなく、むしろ昔の聖人や儒学者の説を統合した理論である。彼の宇宙観には二つの側面があり、一つは天文学、もう一方は運氣論である。天文学は、天体にある七曜（太陽、月と五つの惑星）の軌道を測量すること、また天体の星の位置や流星を観測すること、つまり全ての天象を含めた学問である。天文と言う語は、天体に形成される模様を示し、古代中国から占いと暦法における重要な役割を果たす。儒教の経典である周易・尚書においても、近世日本の儒学者にも、星占いと暦の作り方は統治の基盤とみなされたため、天文学と占星術と暦法は密接に結びついている。

西川如見の宇宙観のもう一方の側面は運氣論と称される。この説は、古代中国の医学書である『黄帝内経』の『素問』から発展し、宋時代の劉

*パリ・ディドロ大学CRCAO院生

温舒が著作した『素問入式運氣論奥』に体系化された。西川如見はこの書物を利用し、運氣論に基づいて天地の自然現象を解釈した。

彼の世界観の中の天文学も運氣論も宋学・朱子学の思想体系に属する。その思想体系では、天地の構成要素になる「理」と「気」が共存している仕組みであると仮定される。また自然現象は全て陰陽五行思想の論理に応じて解説される。それは西川如見特有の思想的枠組みではなく、元禄時代ひいては近世全体の思潮を表す。

3. 「命理」と「形気」の天

西川如見は天体を二種類に分け、「命理の天」と「形気の天」と称する。前者は宋明理学の基礎である「理」を中心とし、測量できない形而上の天を示す。後者は形而下であり、観測できる物質的な天を表す。このような分け方は、形而上学と形而下学の間の境界を定めつつ、より経験的な天文学が発達する状況を整える。形而上学的な「天」は古代中国の聖人の領域であり、その知恵が代々衰え、西川如見の時代にはもはやその「命理の天」について知識が失われたので、彼と同時代の人々の考えは混乱した。それにもかかわらず、形而下学的な「天」に関する知識、すなわち「形気の天」の学習は次第に洗練されて来て、近世の天体測量の技術が古代より詳しくなり、経験的天文学は徐々に一層精密な学問となり得た。

その結果、近世の天文学は物質的な天体のみを観測するべきだと考えられた。なぜなら、古代聖人の説は完璧で、およそ改善の余地がないからである。なお、「命理の天」は非物質的なもので、近世の天文学者が観測できるものではあるまい。ただ古代聖人である伏羲、黄帝、堯、舜等は天体の模様を観察し、八卦を画し、暦と渾天儀を製作した。

つまり、近世日本の天文学の基礎は未だ昔の聖人の説に基づいていた。

西川如見の『天文義論』によれば、根本的に天文学は「天」全体の学問である「天学」の一部となる。天学というものは、形而上の「命理の天」も物質的な「形気の天」も含む学問体系だ。『天文義論』に「二ツノ天ヲ學ブハ同ク是ヲ天學ト可言」(p.2)とある。厳密に言えば、天文学という呼称は「形気の天」に関する学問のみを示している。然るに、近世の天文学者は「天学の徒」と呼ばれ、天学を全体的に理解するのである。彼らは古代中国の聖人から伝承された「天の学」を維持しなければならない。

しかし、天学の改善の余地がある唯一の部分はまだに経験的天文学なのである。その結果、西欧伝来の知識を利用し、近世天文学が技術上進歩することは可能だ。実際に、天体についての技術的な知識を進歩させることは、天文学者の職業そのものである。西川如見は「天学の徒」を「陰陽家」に対比させ、天文学者の仕事を定義する。陰陽家と異なり、「天学の徒」は占いのような真偽が疑わしいことを探求するわけではない。そのような不確実なものについては、古代聖人でさえははっきり説明しないため、天文学者の職務であるまいと考えたのだ。

概して、西川如見の著書を読み解くと、中国の古代聖人の説を尊重する一方で、近世天文学者の仕事は天体観測に過ぎないと考えていることがわかる。天文学の技術は実用的なもので、暦を作るための学問に相違ない。西川如見の『天文義論』は天文学者を志す初心者に向かっているため、学問の限界と目標を定めることはその書籍の要点である。西川如見が天文学者のより「科学的」な職業の在り方を促進していることから、彼が「経験的」な傾向を持つ近世の思潮に身を置いていたことが推定できる。

4. 「暦」と「易」

西川如見の思想に見られる宇宙観は、宋学的な

「体」と「用」の対立に従って、天文学と暦法が分類できる。「体」は天地万物の構造・原理を代表し、「未発」の状態とも言え、「用」はその発現の形で、「已発」とも言う。『天文義論』にはこのように形容されている：「私ニ按ズルニ天文ハ曆易ノ形體ニシテ、易ハ天文ノ理、曆ハ天文ノ用也。是則致知格物ノ主本。学者是ヲ忽ニスベケン哉。」(p.2)

ここにある「易」は、易経に基づいた陰陽五行の原理と言うもので、暦はその原理の応用だと解釈してもよかろう。暦はただ年月の経過を追いかけるのではなく、八卦の組み合わせによって気節または吉凶を定めることが非常に重要なのである。暦のその役割は古代中国からの伝統であり、天人一理観と言う世界観を反映する。天と地と人の三才とも言え、その三つの存在は一貫している。吉凶禍福のことは天地万物の全てを団結させる。それゆえ、総合的な天学は倫理的な側面もあり、「致知格物の主本」となる。

5. 結び

西川如見は朱子学の主義を守り、「修身」と「格物」の学習を合併させ、次のように天学の本義を説明する：「人ハ天ノ靈也。其道ハ天ノ道也。其天學ト不云事ヲ得ン乎」(p.2)。すなわち、人の道と天の道は相違がなく、天学には結局倫理学と自然哲学が重なっている。その倫理はむろん儒教・宋学的なため、遙か古聖の時代から改善されないものであるが、自然哲学の技術的な部分は南蛮系天文学と言われる西欧風の宇宙論の影響も受け、増進されることがある。

拙論においては西川如見の著書を対象に、西欧伝来の宇宙論を巡る書物の流布に注目した。その宇宙論は主に地理学・航海術または天文学自体を扱う書物に記載され、イエズス会の宣教師やポルトガルの商船により東アジアに到達した。いわゆる南蛮系地理学・天文学的な知識に関してイエズス会の宣教師伝来の西欧の宇宙論は、二つの経路

を通して日本へ伝来した。一方では九州の各地に建てられたコレジョというイエズス会の神学校で教えられた科目に、自然哲学・天文学も含まれた。もう一方では、イエズス会の宣教師が中国で地元の学者と協力し、西洋の科学について書いた図書もまた日本に輸入された。

西川如見は中国語の通訳者である「唐通事」たちと交流していたため、おそらくそれを通して、明時代に著作された『天経或問』、『物理小識』などの西洋の自然哲学に触れる書物を手に入れることができた。さらに、日本側では、南蛮系宇宙論に言及する小林謙貞の『二儀略説』や向井玄松の注釈した『乾坤弁説』も閲覧できたであろうと思われる。今後は西川如見を中心に、上記の概略した陰陽五行思想体系に加え、西洋伝来の宇宙論が近世日本の学者においてどのような影響を及ぼしたか研究したい。つまり「格物致知」が基盤であるその思想体系の中で、西洋の地理・天文学的な知識がどのように発展したのかと探求しようとする。

参考文献

- 源了圓と末中哲夫、『日中実学研究』、思文閣出版、1991
- 中山茂、A History of Japanese Astronomy: Chinese Background and Western Impact. Cambridge: Harvard University Press, 1969
- 西川忠亮編、『西川如見遺書』8巻、西川忠亮、1898-1907
- 佐久間正、『徳川日本の思想形成と儒教』、ペリカン社、2007
- 杉本勲編、『近世実学史の研究－江戸時代中期における科学・技術学の生成－』、吉川弘文館、1962
- 杉本勲、『近世日本の学術－実学の展開を中心に－』、法政大学出版局、1982
- 渡辺浩、近世日本社会と宋学、東京大学出版会、1985
- 頼祺一編、『日本の近世13 儒学・国学・洋学』、中央公論社、1993
- 柳沢南、『西川如見と清代儒学』『哲学・思想論叢』第1巻、3～15頁、筑波大学1982-12